

宮崎県小林市（国内 19 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要（令和 2 年 12 月 8 日実施）

令和 2 年 12 月 8 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、15 例目の発生農場から、約 400m 離れた山間部の河川沿いに位置し、付近は山林に囲まれている。
- ② 農場から約 150m の距離に河川が流れており、約 1km、約 3km の距離にはそれぞれダム湖が存在する。
- ③ 当該農場には平飼いの開放鶏舎が 4 棟あり、発生時はすべての鶏舎で、肉用鶏が飼養されていた。発生鶏舎は、農場入口から最も奥に位置する鶏舎であった。

2 通報までの経緯

- ① 発生鶏舎における 1 日あたりの死亡鶏は、11 月 29 日までの過去 21 日間の死亡羽数は 4~5 羽で推移していた。11 月 30 日に全ての鶏舎の死亡羽数が 14~15 羽に増えたが、管理人によると、大腸菌症対策として投与していた抗生物質を前日に終了していたこと、全ての鶏舎で同時に増加したことから、大腸菌症による影響と考えたとのこと。
- ② 12 月 3 日に発生鶏舎の死亡羽数が 15 羽となったが、15 例目に伴う周辺農場検査において、全ての鶏舎で、陰性が確認された。
- ③ 管理人によると、12 月 5 日にかけて死亡羽数は一旦減少したが、6 日に再び 19 羽となったことから親会社に報告したところ、翌日まで様子を見ることとなり、7 日の午前中に 20 羽が死亡したため家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ④ 管理人によると、12 月 7 日の死亡鶏は鶏舎の奥側にまとまる傾向があったが、肉冠の異常等は認められなかったとのこと。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では主に 2 名の従業員が専属で管理を行っており、毎日、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏の回収を行っていた。これとは別に、系列 4 農場を統括する従業員が 1 名いるが、15 例目の発生以降は、消毒等の対応のために、19 例目農場のみで作業を手伝っていた。
- ② 従業員が担当する鶏舎は決まっておらず、2 名の従業員はいずれの鶏舎においても作業する可能性があった。入雛や出荷の際も、農場の従業員以外の作業者が入ることはなかった。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 管理人によると、従業員は農場に入る際にシャワーを浴び、農場専用の作業着と手袋、長靴を使用していた。また、鶏舎毎に専用の長靴、作業着と踏み込み消毒槽を設置しており、手指消毒を実施していたとのこと。
- ② 鶏舎横には飼料タンクが設置されているが、当該タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ③ 管理人によると、車両が当該農場に出入りする際、農場の入口に設置された動力噴霧器により消毒を行っていたとのこと。
- ④ 管理人によると、健康観察時に回収した死亡鶏はかごに入れ、農場入口に設置された冷蔵庫に保管し、溜まる度に死亡鶏回収業者に回収を依頼していたとのこと。この際、回収業者の車両は、農場入口の動力噴霧器で車両消毒を行っていたとのこと。

- ⑤ 管理人によると、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行うとともに、鶏糞を業者に委託し、排出しているとのこと。
- ⑥ 管理人によると、普段から鶏舎周囲に消石灰を散布していたとのこと。
- ⑦ 発生鶏舎の側面は金網（マス目は約2.0×2.0cm）とその外側の上部にロールカーテン、下部に跳ね上げ式の窓が設置されている。また、奥側の壁には排気用の換気扇が設置されていた。
- ⑧ 管理人によると、飼養鶏への給与水は、地下水をくみあげ、当該農場専用の貯水タンクにて消毒した後、各鶏舎に供給されているとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 発生鶏舎の外壁や金網にはわずかな隙間や破損が認められたが、大きいものは修繕されていた。
- ② 管理人によると、鶏舎内でネズミを見かけることはたまにあり、粘着テープ等のネズミ対策を行っているとのこと。
- ③ 管理人によると、農場内ではカラスが確認されることもあるが、鶏舎内で確認したことはないとのこと。